

令和4年度学校経営の基本方針

校長

教育目標 心豊かに自らを切り拓く子ども

重点目標 自分の可能性を信じ、自分の夢や希望を
実現しようとする子ども

◇令和4年度の経営の基本スタンス

*全職員が、全ての学年・学級の担任としての意識をもち、子どもたちを理解し、見守り、育てる。全職員10人で40人を育てる。

*「自分の可能性を信じ」とは？

自分のよさは人との関わりの中で気付く。人や社会と関わりながら、認められることで、自己肯定感が育ち、自信へとつながっていく。自分に自信をもつことが「自分の可能性を信じること」につながる。

*目指す子どもの姿について

重点目標を達成するための基盤ととらえる。

基盤となる3つの力を育てるために、グランドデザインで目指す姿、成果目標、達成の手だてを明示し、全職員で共通理解を図り、取り組んでいく。

重点目標達成のための

◎「汎愛村校」（開学の精神）の実現：150周年行事を通して

・どの子にも、学習の権利や教育活動への参加の機会を保障する。

=小規模である馬場小にしかできない教育。馬場小だからこそできる教育

○具体的には

・それぞれの教育活動のねらいを再確認し、取り組む。

・子どもたちがやる気（意欲）をもてるように支援する。

子どもたちの向上心を引き出し、ポジティブな姿勢で対応する。

・職員が、互いに連携し、支え合う。

子どもたちのモデルとなる人間関係を築く。

◎「馬場っ子」育成のキーワード

○目を離さず、手を出し過ぎず=適切な距離感

少人数校の指導の強みは、実態がよく見えるので、一人一人の成長を見逃さず認め、自信につながられる。活動後の振り返りを生かした個に応じた指導も可能である。

少人数校の指導の弱点は、実態がよく見えるために、待つべきところなのにすぐに助け舟を出してしまう。これを克服する。

◎何のための活動か、子どもも教師も理解。

○組織として動く。

馬場小学校の教育活動は、すべて教育目標、重点目標を達成するための活動である。この活動は、重点目標にどのようにつながるのか、考えて教育活動を推進していく。今年度は、このことがより明確になるような学級経営、分掌経営を目指す。

○多忙化の軽減を踏まえ→多忙感の軽減

教員は多忙である。しかし、自分で思いをもって活動することで感じ方は変わってくる。やらされている活動から、めあてを明確にして達成のための活動と再認識する。

「何のため」目的の明確化 → やりがい → 多忙感の軽減

※合言葉「やればできる」について

当初の看板の揮毫 元馬場小校長 星名武男先生（中条在住）



子どもたちの大好きな「やればできる」。しかし、安易に合言葉に頼って、努力を怠ってはいないであろうか。実際にやってみることによって、達成できる可能性が広がることは確かだが、「やればできる」と唱える（精神論）だけでは、「できる」可能性は低い。スタートの動機付けとしての「やればできる」から、「できる」につなげるために次のことに取り組む。

- 1 子どもたちの**意欲**を育て、見通す力（**計画力**）を養い、**行動力**を育てる。
「できる」ようになるためのスキルを習得させる。目的、目標、方法を明確にする。学習における「自己調整力」を身につけさせる。
- 2 うまくいかない時の対処法（**レジリエンス**）を知る
レジリエンス：落ち込んでも立ち直る力。失敗した時や人に助けられた時にも育てることができる。
成功しなくても成長していることに気づかせる。
- 3 **根気強く**取り組むことも大切。
ある意味、耐性を育てるタイミングをみのがさない。できるまでやり続ける根気強さ。

やる前から「ぼくにはできません」と聞くことがある。できませんと言っている限りは、まずできない。子どもに「やってみよう。できるかも。この機会を生かして頑張ればできるかも」と思わせ取り組ませて、適切な支援を行うことで「できた」という経験を積ませる。それが重点目標にある「～自分の夢や希望を実現しようとする子ども」を育てることにつながる。